

# 自分の気持ちや考えを伝え合うコミュニケーション能力の育成 ～全面実施を見据えた英語科の取組を通して～

荒尾市立中央小学校

## 1 研究主題設定の理由

### (1) 教育の今日的課題から

近年、子どもたちを取り巻く社会は「予測困難な社会」と言われている。情報化やグローバル化、絶え間ない技術革新といった変化が目まぐるしいスピードで進んでおり、先を見通すことが難しくなっている。そのような状況の中で、子どもたちは様々な文化的背景を持ったあらゆる他者と協働しながら社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓く力が求められている。自分の思いを伝えたり、他者の思いを真剣に聞き理解したりするなど、気持ちを伝え合い、他者とのよりよい関係を築こうとする力を育むことは、学校教育においてますます重要な分野をしめると考える。

子どもたちが社会で活躍するころには、一層、多文化、多言語、他民族の人たちと協働するようになり、社会的にも職業的にも英語を始めとする外国語を用いてコミュニケーションを図る機会が確実に増えることが予想される。そのような中、これまで以上に「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を活用して実際の言語使用場面を意識した英語教育を推進することは、将来のためにも非常に有益である。

さらに、母語以外の言語を学ぶことで、母語でのコミュニケーションでは意識していなかった「注意深く聞いて何とか理解しようとする」力や「既習の知識を総動員して何とか伝えようとする」力を育むことにもつながると考える。

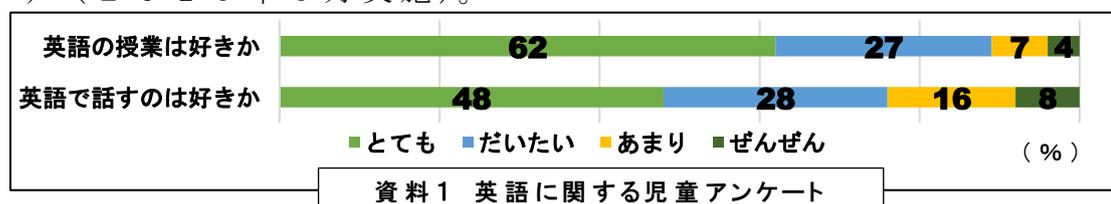
### (2) これまでの取組から

本校は文科省の「小学校英語に係る教育課程特例校」の指定を受け、平成26年度から全学年で英語教育に取り組んでいる。低学年は短時間学習（モジュール学習）、中・高学年はモジュール学習と一単位時間を組み合わせて英語教育を行い、全職員一丸となって英語科の学習指導方法の工夫改善を研究してきた。新教材を取り入れながら「聞く」「読む」「話す」「書く」活動の工夫改善に取り組むことで、全面実施への円滑な移行と更なる学習の充実が期待できると考える。

### (3) 本校の児童の実態から

本校全体の児童の実態として、明るく素直で、与えられた課題に対して真面目に取り組むことができる児童が多い。一方、上手く自分の思いを伝えることができなかつたり、コミュニケーションの取り方が分からずに自分から友だちと関わることに抵抗を持っていたりするなど、学級の中で人間関係づくりに課題を持つ児童も見られる。

次に、昨年度英語科の学習に取り組んだ本校児童の実態を資料1に示す（2019年6月実施）。



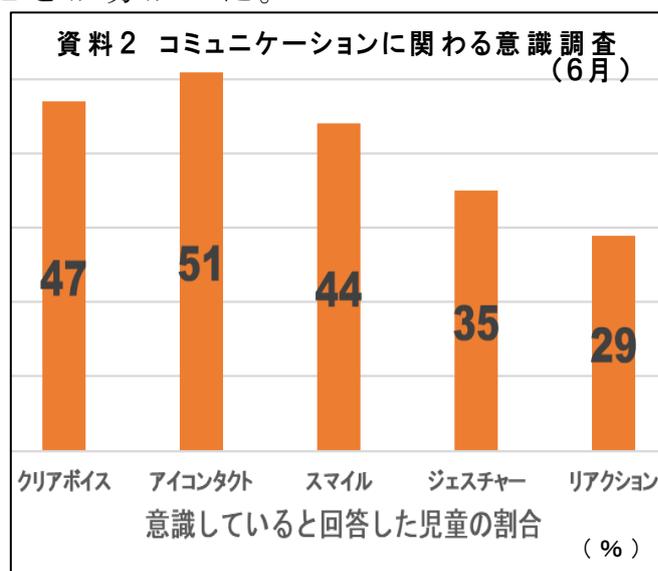
資料1から分かるように、英語科の授業に対して90%近くの児童が「とても好き、だいたい好き」と答えており、全学年で系統的に行ってきた英語教育の推進や授業改善により多くの児童が英語に親しんでいることがわかる。「とても好き」の理由を分析すると、活動自体の楽しさを感じている児童もいるが、英語を使って「友だちのことを知る楽しさ」も理由として多いことが分かった。一方で、英語科の授業を「好きではない」と回答している児童もいる。どの学年にも共通して「難しい」という理由が挙げられた。ゲームを始めとする慣れ親しみや、見通しを持たせるデモンストレーションなどスモールステップでの単元構成を行い、「いつの間にかできた」「だんだんできるようになった」という自信を持たせていく必要がある。

「英語で話すことは好きか」という項目に関しては、概ね「とても好き、だいたい好き」と回答しているが、「あまり好きではない、ぜんぜん好きではない」という児童が24%いるということも明らかになった。「好き」と答えた児童の中には「英語の時間だと、普段あまり話さない人とも話せる」といった理由もあり、英語を通じた人間関係づくりや他者理解などコミュニケーションの幅が広がっていることが感じられた。「好きではない」と答えた児童の理由としては、活動自体を嫌いと感じているよりも、英語を使うことへの自信のなさや友だちへ伝えることへの不安感を持っていることが分かった。

また、本校がコミュニケーションを支える土台として大切にしている5つのコミュニケーションポイント「CESGR (Clear voice, Eye contact,

Smile, Gesture, Reaction)」に関する調査では、友だちの話を聞いてリアクションを意識しているかという問いには、「意識している」と回答した児童が29%しかいないことが分かった(資料2)。やりとりの場面でも、適切な返しができないまま、一方的に伝えて終わってしまっている状況が見えてきた。

本校が英語科の研究を始めて6年目。全学年で英語に親しむ機会を設け、その指導内容の工夫改善を重ねてきたことの大きな成果があったと言える。しかし、コミュニケーションを図る活動への導き方、必要感や達成感につながるゴールの設定など、課題も見えてきた。これらのことから、単元構成の工夫や全学年で全面実施を見据えた授業改善を行い、自分の気持ちや考えを伝え合うコミュニケーション能力の育成を目指して、本研究主題を設定した。



## 2 研究主題についての基本的考え

### (1) 研究主題・副主題のとらえ方について

#### ア 「気持ちや考えを伝えるコミュニケーション能力」とは

慣れ親しんだ語句や表現を使って、自分のことや身の回りのことについて自分の気持ちや考えを伝えることである。「何とかして伝えたい・自分だったらこう言いたい」という思いを大事にし、言語的手段だけでなく非言語的手段を用いて伝えることも含む。また、コミュニケーションを行う際には、頷いたり相手の話に反応を示したりすることで対話が続いていく。このことから、相手に質問したり反応したりできる聞き手を育てる指導も行っていく。

#### イ 「全面実施を見据える」とは

「聞く・読む・話す・書く」といった4技能を活用して実際の場面を意識した言語活動を一層重視していくことである。各単元で「英語のどんな力をつけるか」を明確にし、4つの技能が個々に行われるのではなく、4つの技能を関連させながら単元のゴールに向かう授業を行っていく。また、研究指定校として、他校へ英語教育推進の啓発を行うことも本校の使命であると考え。そこで「Let's Try!」や「We Can!」といった新教材も活用しながら、どの学校でも取り組めるような単元構成の工夫を行う。

### (2) 本校「英語科」について

#### ア 英語科の目標

英語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことなどのコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する。

#### イ 目標の3つの柱

(ア) 外国語の音声や文字、語彙、表現などについて日本語と外国語との違いについて体験的に理解を深めるとともに、聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと等、実際のコミュニケーションで活用できる基礎的な技能を身につけるようにする。 【知識・技能】

(イ) 自分や相手のこと、身近なことについて、既習の表現を使って聞いたり話したりするとともに、基本的な語彙や表現を推測しながら読んだり、自分のことを伝える表現を書き写したりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。 【思考・判断・表現】

(ウ) 英語でいろいろな人に進んで話しかけたり、相手の話している内容に反応したり、質問したり答えたりしながら、他者と進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

【主体的に学習に取り組む態度】

### (3) モジュール学習について

全学年で日課に15分間の0校時を設定し、年間で60回、計20単位時間を英語科モジュール学習として取り組んできた。短時間で繰り返し学習をすることで、英語の音声や使用表現に慣れ親しむことを目的としている。1・2年生は計20単位時間分、3・4年生は計10単位時間分程度、5・6年生は計20単位時間分のモジュール学習を行う。3・4年生は、1単位45分の授業を年間で35回行い、5・6年生は50回行う。なお、3年生以上は、モジュール学習を単なる反復練習の時間に当てるのではなく、45分授業におけるコミュニケーション活動が充実できるよう関連を図りながら実施していく。

## 3 研究の構想

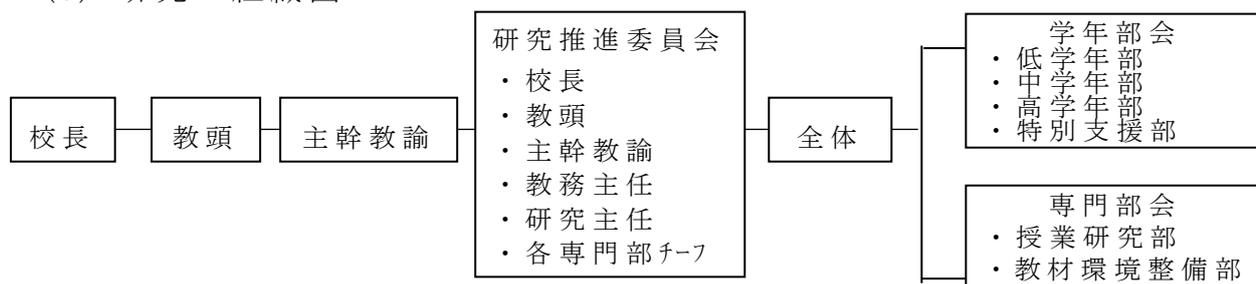
### (1) 研究の仮説

<p><b>【仮説1】</b> 新教材を活用した単元指導カリキュラムの作成や、必要感や達成感を味わわせるための学習指導の工夫を行うことで、自分の気持ちや考えを伝え合うコミュニケーション能力の育成につながるであろう。</p>
<p><b>【仮説2】</b> 児童を取り巻く英語環境を整えたり、日常的に英語に親しむ機会を増やしたりすることで、英語に対する興味・関心が高まり、自分の気持ちや考えを伝え合うコミュニケーション能力の育成につながるであろう。</p>

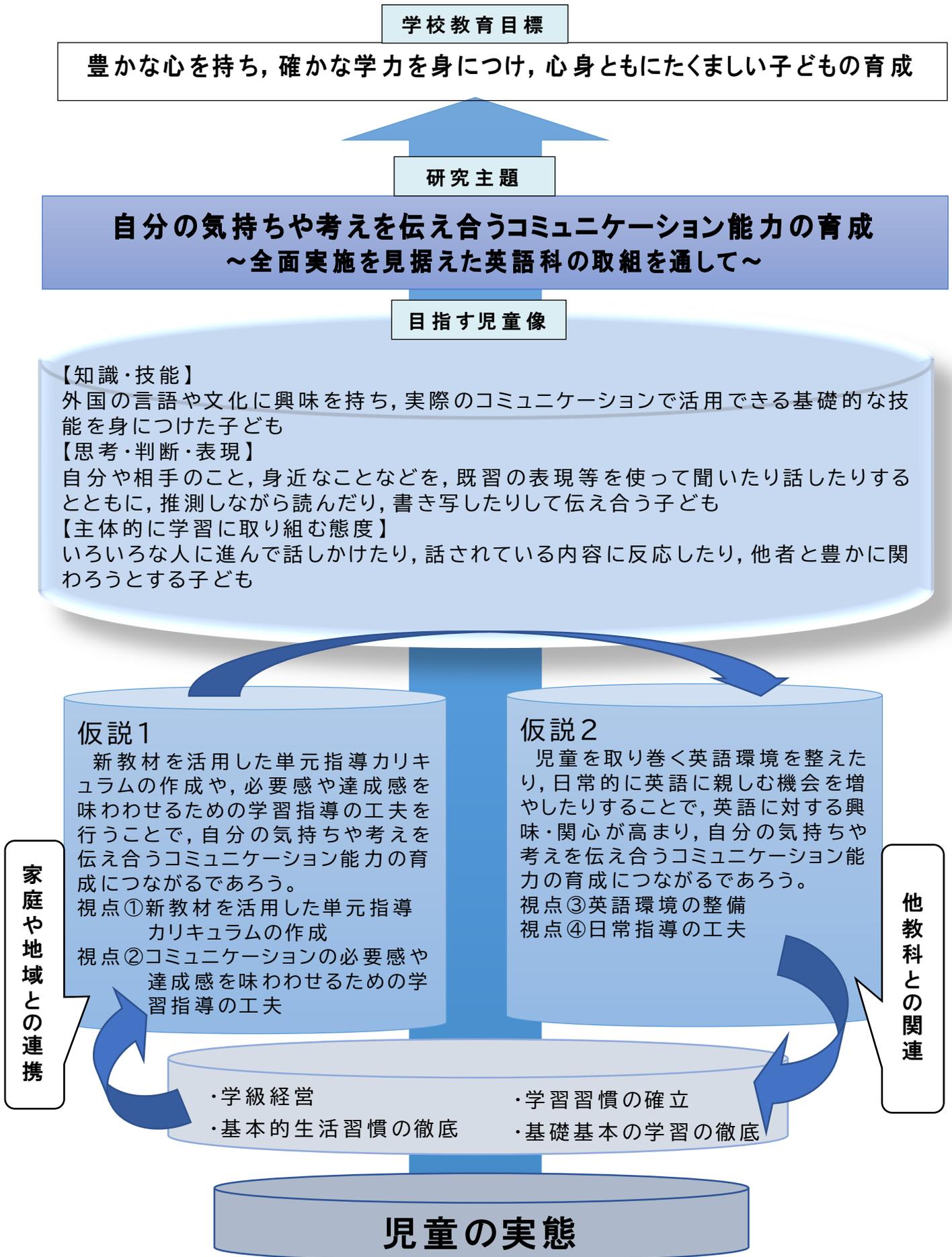
### (2) 研究の視点と内容

仮説	視点	内容
1	① 新教材を活用した単元指導カリキュラムの作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学年系統表，年間指導計画，単元指導計画の見直し</li> <li>・ 新教材を効果的に取り入れた単元展開</li> <li>・ 単元構成の工夫（魅力的なゴールの設定）</li> <li>・ 高学年における読む・書く活動を取り入れた単元構成</li> </ul>
	② コミュニケーションの必要感や達成感を味わわせるための学習指導の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新たな教材・教具の開発（ワークシート等含む）</li> <li>・ 関わる必要感が生まれるコミュニケーション活動の工夫</li> <li>・ 児童の実態把握のためのアンケート作成・実施・分析</li> <li>・ 授業力向上のためのスキルアップ研修</li> <li>・ small talkの充実</li> </ul>
2	③ 英語環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 校内掲示物の内容検討及び作成</li> <li>・ 学年掲示板「イングリッシュコーナー」の作成</li> <li>・ 教材・教具の整理及び保管</li> </ul>
	④ 日常指導の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今月の歌（英語バージョン）の作成・提案</li> <li>・ 英語集会の充実</li> <li>・ 委員会活動との連携</li> </ul>

### (3) 研究の組織図



4 研究の構想図



## 5 研究の実際～専門部の取組～

### (1) 視点1：新教材の指導計画に沿った単元指導カリキュラムの作成 ア 年間計画，単元指導計画の見直しについて

本校で作成している単元の系統表を基に，各学年で年間指導計画を作成した（資料3）。各学年の目標及び単元名や単元の目標，主要言語材料などが一目で分かるようにした。目標は，次期学習指導要領で示された「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「学びに向かう力・人間性」に基づき整理した。主要言語材料は，新教材の中から児童の発達段階を考慮し，組み込んだ。その中で，児童に身近な場面やテーマを取り入れたり，既習の表現や語彙が繰り返し活用されるような計画にしたりする工夫をした。また，学年の年間指導計画を基に単元を構成し，45分授業ごとの指導計画を作成し，すぐに授業に生かせるようにした。

知識・技能	外国の言語や文化に興味を持ち，日本と外国の相違点や共通点に気付く。
思考力・判断力・表現力	身近で簡単な事柄について話したり，友だちに尋ねたりすることに慣れ親しむ。
学びに向かう力・人間性	自分や相手のこと，身近で簡単な事柄について既習の表現やジェスチャー，実物等を使って伝えたり聞いたりすることに慣れ親しむ。
	いろいろな人を通して話しかけたり，反応しながら聞いたり，他者と豊かに関わろうとする。

(モジュール学習 30コマ、45分授業 35時間)

月	単元名(単元のゴール)	コマ	日数	目標	主な言語材料
5	あいさつと自己紹介をしよう (かかわりあえる人になってみんなと仲よくならう)	2	3	○アニメのキャラクターになりきって，名前や年齢などの自己紹介をすることができる。(知識・技能) ○英語を使って，自分のことを伝える自己紹介をすることができる。(思考力・判断力・表現力) ○クリアボイス，アイコンタクト，スマイルを大切に，進んであいさつしようとしている。(学びに向かう力・人間性等)	I like ~. Do you like ~? How old are you? I'm ~ years old.
5	好きな遊びを伝えよう			○遊びや動作を表す言葉に慣れ親しむ。(知識・技能) ○自分の好きな遊びに誘ったり，相手の誘いに答えたりすることができる。(思考力・判断力・表現力)	How's the weather? It's (sunny / rainy / cloudy / snowy).
6	(4年C組人気の遊び No.1 をさがそう)	2	4	○様々な動作，遊びや天気の良い方をジェスチャーや動作を使いながら楽しんでいる。(学びに向かう力・人間性等)	Let's ~. Yes, let's. Sorry. Stand up. / Sit down. / Stop. / Walk. / Jump. /

資料3 年間指導計画

### イ 魅力的なゴールの設定

児童が単元を通して意欲的に学習に取り組むことができるよう，各学年で魅力的なゴールの設定をした。第3学年では，単元のゴールを「形を集めてオリジナルカードを贈ろう」と設定した。まず，カードを贈りたい人とカードの種類（Christmas, Birthday, Thank you, New year）を決め，カードに貼る様々な色の形を友達からもらう活動を行った。カードのイメージから自分が必要とする形をもらおうという必然性があり，活発な活動が行われた。カードを贈る相手を思いながら，受け取った形を画用紙に貼り付けカードを仕上げるといった楽しいゴールとなった（資料4）。



資料4 オリジナルカード

第6学年では，単元のゴールを「日本を紹介するポスターを作って海外に送ろう」と設定した。最後には日本を紹介するポスターを作成し，ALTの母校に作品を送ったところ，相手の小学校から写真を送ってもらうことができた（資料5）。海外の子どものとの交流は，児童にとって学習意欲の高まるゴールとなった。



資料5 海外との交流

## ウ 高学年における書く活動

児童が目的をもち、かつ抵抗なく書く活動ができるよう計画的に取り組んでいった。授業では、始めに学習した単語をなぞる、次に使いたい言葉を選んで書き写すなど段階を追って活動をしていった。第5学年「世界の友達に一日の生活を紹介しよう」では、自分の一日の生活について手本を見ながらカードに書き、それを見せながら紹介する、という活動を行った。自分が伝えたいことを文字や音声で表現することができた。

## エ リアクション表の作成

児童同士の会話をつなぐ言葉として、「リアクション（低・中・高）」を作成した。児童の発達段階に応じて低・中・高学年と系統的にリアクションが増えるようにしている。また、本年度はさらに活用しやすいように、下部分に余白を作り、授業の中でよく使った表現等を書き足し更なるリアクションの充実を図るようにした（資料6）。全学級に掲示し、リアクションを意識させることで、いつでも児童が活用できるようにしている。



- (2) 視点2：コミュニケーションの必要感や達成感を味わわせるための学習指導  
ア 授業展開の工夫

### (ア) バックワードデザインでの単元構成

単元の学習計画は、バックワードデザイン（逆向き設計）で構成した。授業を構成する際に、最終的に身につけさせたい力を明確にし、そのために各時間でどのような活動や指導が必要かを考えた。段階を踏んで単元のゴールで必要な力を育てていくことを意識して作成した。

#### 【バックワードデザインのポイント】

- ① ゴールの活動の設定
- ② ゴールの達成に向けた各時間の目標を設定
- ③ ゴールの活動で必要な語句や表現に慣れ親しむ活動を設定
- ④ 単元の導入の設定

### (イ) 形成的評価

本時の目標を達成した姿に近づけるために、授業の主活動の途中で形成的評価を行った。形成的評価では、本時の評価基準Aに達している児童や、相手意識をもってやり取りをしている児童を対話の模範として紹介した。そうすることで、児童の具体的な姿から学び取り、後半のコミュニケーション活動に生かせるようにした。

## イ 児童の実態把握のためのアンケート

1回目のアンケートを6月（Unit1が終了した後）に実施し、

夏期休業中に児童の実態を分析・考察することで、9月からの授業改善に生かした。さらに、12月に2回目のアンケートを実施し、1回目と2回目の結果を比較することで、研究の成果と課題を把握することができた。

アンケートの内容については、下記のとおりである。

番号	質問内容	低	中	高
1	英語の授業は好きか	○	○	○
2	先生（担任，ALT）や友だちが話している英語を聞くのは好きか。	○	○	○
3	習った英語を使って，友だちと話すのは好きか。	○	○	○
4	意識してできているものに○を付けましょう。理由を書ける人は，理由を書きましょう。（複数選択可） クリアボイス，アイコンタクト，スマイル，ジェスチャー，リアクション	○	○	○
5	英語の時間に，自分から進んで友だちに話しかけようとしているか。	○	○	○
6	簡単な英語を書いてみたいと思うか。	/		○
7	簡単な英語で書かれた文を読んでみたいと思うか。			○
8	簡単な英語を書くことができるか。			○
9	簡単な英語で書かれた文を読むことができるか。			○
10	簡単な英語を話すことができるか。			○
11	簡単な英語を聞くことができるか。			○

以下の内容は、1回目のアンケート結果と改善策である。

#### (ア) 高学年

コミュニケーションを図る際に、リアクションを意識していると答えた児童は、3割程度であった。英語のリアクションにどのようなものがあるのかを知らない児童もいるため、リアクション一覧表を作成して掲示し、授業で活用できるようにしていく。また、教師が積極的に活用して見せる必要がある。

#### (イ) 中学年

2割から3割程度の児童が英語を話すことや、自分から話すことに対して「あまり・全然」と回答している。その理由として、「学習したことを忘れてしまう」「難しい」などが挙げられた。モジュール学習の時間を効果的に活用して、児童が新しい語彙や表現に慣れ親しむ時間を十分に確保することで、コミュニケーションへの抵抗感を払拭できるようにする工夫が必要である。

#### (ウ) 低学年

9割以上の児童が「英語の授業を好き・どちらかといえば好き」と回答している。しかし、「進んで話しかけること」に対して3割の児童が「あまり・全然」と答えていた。その理由としては、「どのように言えばいいかわからないから」「自信がないから」などが挙げられた。英語の入門期である児童が自信をもって取り組めるように、児童が楽しさを感じているゲームや歌などの活動を中心に、無理なく学べる工夫が必要である。

#### ウ 授業力向上のためのスキルアップ研修

今年度は、計4回のスキルアップ研修を行った（資料7）。その内の2回を研究主任が、2回を授業研究部の職員が中心となって

実施した。

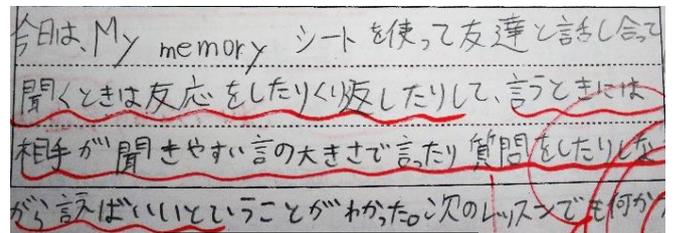
第1回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Classroom English (授業の始め方・終わり方)</li> <li>・ 表現に慣れ親しませるときに効果的な活動 (トリックリピート, ワードデニス等)</li> </ul>	
第2回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教科書を活用した「聞くこと」「話すこと」の指導</li> <li>・ 表現に慣れ親しませるときに効果的な活動紹介 (協力ゲーム, Hidden game, Back-chain drill 等)</li> <li>・ フォニックスやジングルに関する活動</li> </ul>	
第3回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ バックワードデザインの授業作りについて</li> <li>・ Small talk について</li> </ul>	
第4回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 表現に慣れ親しませるときに効果的な活動紹介 (3 ヒントクイズ, 歌の活用等)</li> </ul>	

資料7 スキルアップ研修

このように、すぐに授業で生かすことができる活動や、移行期教材に対応したもので多様な研修が構成されており、職員全体の英語指導力向上に効果的な研修となった。

#### エ 児童の達成感を見とる振り返りシート

児童の到達度や自信, 不安といった情意面を把握する手がかりの一つとして振り返りシートを活用して, 毎時間自己評価をさせた (資料8)。単元のゴールに向けた



資料8 振り返りシート

見通しがもてるように本時の学習内容を明記した欄を設け, 振り返る際の視点を「①できたこと・分かったこと, ②友だちから学んだこと, ③次に頑張りたいこと」の3つに整理した。さらに, 本年度は記述欄を3行で構成した。記述量よりも記述する内容を意識させ, 決められた時間の中で決められた量を書く力の向上を図った。また, 高学年の振り返りシートには, 記述したことに対して友だちからコメントをもらう, 相互評価の欄も設けた。

### (3) 視点3: 英語環境の整備

#### ア 校内掲示物の工夫

校内掲示物は, 主に児童昇降口と2階廊下, 各階段に掲示している。児童昇降口には, 児童の登校時に目にとまりやすいようにクイズや穴あきの英単語を掲示した。クイズ形式で, めくって確かめられる操作活動を入れることで児童の興味関心を喚起できるように工夫している。また季節に合わせた英語を掲示し, 身近な生活との関連を図った (資料9)。



資料9 昇降口前イングリッシュコーナー

2階廊下には, ロンドン日本人学校に勤務する本校職員からの「ロンドン通信」と ALT の国について紹介する「ニュージーランドコーナー

一」を掲示した。ロンドン通信では、イギリスの食べ物や行事など、日本と似たところや違うところを紹介しており、外国の文化にも親しむことができた。ニュージーランドコーナーでは、ニュージーランドの国旗や自然、有名なものを紹介している。児童は、ALTの出身地を通して、世界の国々へも関心が高められたようだった。

#### イ 各学年のイングリッシュコーナーの工夫

階段の踊り場などに、学年ごとの「イングリッシュコーナー」を設けた。各学年で学習した英語表現や教材、絵カードなどを活用し、英語を身近に感じることができるようになっている（資料10）。また、前単元の内容を掲示することで、既習の学習を振り返り、定着を図っている。授業での児童の作品や職員へインタビューをした内容を掲示することで、興味関心を高める工夫を取り入れた。



### (4) 視点4：日常指導の工夫

#### ア 英語集会の充実

年に2回、情報国際委員会が中心となって英語集会を行っている。集会の内容も、英語の楽しさに触れたり英語でコミュニケーションを図ったりできるよう工夫している。6月に行った英語集会では、振り付けを交えた英語の曲を紹介し、12月の集会では他学年とのあいさつゲームや英語クイズを行った。

#### イ 委員会活動との連携

情報国際委員会では日常的な活動として、イングリッシュあいさつ運動や「一言イングリッシュ」の放送、児童昇降口の英語ボード掲示を行っている。運営委員会は全校集会の進行を英語で行い、英語の指示で全校児童も動くことができている。また、放送委員会が朝から英語の曲を流したり、毎週金曜日にイングリッシュデーとして英語で放送を行ったりすることで、日常的に英語を聞く環境ができていく。

## 6 研究の実際～授業実践～

### (1) 低年部の取組

#### ア 第1学年 Lesson3 「数で遊ぼう」

#### イ 具体的方策

- ・数を使った歌を、ジェスチャーや手拍子を入れて歌うことで楽しく数を表す英語表現に慣れ親しむようにする。
- ・数あてゲーム（1～10までの数がついたカードを5枚ずつ持ち、ペアで「What's this?」「It's~.」と数を尋ねたり答えたりし合うゲーム）をすることで、表現に親しみながら意欲的にゲームに

取り組ませる。その際、答えられない数はお互いに教え合ったり周りの友達に尋ねたりして答えられるようにし、表現に自信のない児童にもゲームの楽しさを味わわせるようにする。

- ・ゲームを始める前に、児童と教師でゲームの方法のデモンストレーションを行い、ゲームのルールをどの児童も確実につかむようにする。

ウ 本時の目標 1～10の数を表す表現に慣れ親しんでいる【知識・技能】  
エ 本時の展開（6コマ目／モジュール学習10コマ扱い）

過程	児童の活動	教師の指示・支援（T）と児童の反応や様子（C）
Warm up	1 Greeting. 2 Let's sing a song. 3 Today's goal	T: Good morning everyone. C: Good morning sensei. T: Let's sing "Seven steps". C: 「1~10の数を表す言い方に慣れよう」
	4 Let's chant.	T: one, two, three...
Activity	5 Let's play a game. 「数あてゲーム」 (1) 代表の児童とやりとりのデモンストレーションを行う。 (2) ペアでゲームを行う。	T: デモンストレーションを見てみましょう。 ① ペアになり1～10までのカードを分ける。 ② Do gyankenをして、順番を決める。 ③ 勝った子が“What's this?”と相手に尋ねる。 ④ “It's～”と正解を言えたらカードをもらえる。 ⑤ 答えられなければ、ペアの児童や先生に尋ねて、必ず答える。 ⑥ 交互に尋ね合い、5枚ずつカードをもらう。 ⑦ 最後にラッキーナンバーを持っている子が勝ち。
	6 Looking back. 7 Greeting.	T: 自分の頑張ったことやできるようになったことを教えてください。 C: 友達に数の言い方を教えることができました。

#### オ 考察

- ・数を使った歌をいろいろなバリエーションで繰り返し歌うことで、楽しく英語表現に慣れ親しむことができていた。
- ・数を表す英語表現に慣れていない子も、友達や先生に聞いて答えることができるというルールのおかげで、安心して「数あてゲーム」に参加し、積極的に英語で話すことができていた。
- ・児童と行うデモンストレーションでは、事前に児童と打ち合わせをしていなかったため、やり方をしっかりつかませることができず、それぞれのペアでやり方が違う場面があった。デモンストレーションを行う際は、事前の打ち合わせや、予め用意した動画を使うなど、混乱を招かない工夫が必要だと分かった。

#### (2) 中学年部の取組

ア 第4学年 Unit7 「What do you want?」 (Let's Try!2)

イ 具体的方策

- ・第1時で、単元の最後に行うオリジナルピザ作りのモデルを示し、英語でやり取りをする必要性に気付かせ、学習意欲が高まる



## オ 考察

- ・児童の理解のためのデモンストレーション及びやり取りの練習を十分に行ったことで、児童が楽しみながら英語に親しむ姿が見られ、振り返りシートに「たくさん食材を集められた」「ちゃんと自分のほしいものが伝えられた」「友達のほしい食材をしっかりと聞き取れた」等といった記述が多く見られた。
- ・「オリジナルピザを作りたい」という目的意識が明確な活動だったため、自分の気持ちを活発に伝え合うことにつながった。
- ・形成的評価で取り上げた児童は、「アイコンタクト」「ジェスチャーをつけて伝える」ができていた児童だった。しかし、今回の活動では、より正確にほしい物と数を伝えることが求められるため、食材をゆっくりはっきり言ったり、相手に確かめながら食材カードを渡したりしている児童を取り上げることが必要だと分かった。その上で CESGR はよりよいコミュニケーションへと高めるものとして指導すべきだと捉えた。

### (3) 高学年部の取組

#### ア 第5学年 Unit5 「She can run fast. He can jump high.」(We Can!1)

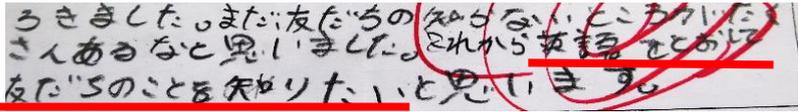
#### イ 具体的方策

- ・単元のゴールを「友だちクイズを出そう」と設定し、友だちにインタビューして分かったことを「He can ~. / She can ~.」という表現を用いて伝えるようにする。新出の言語表現の定着を図るだけでなく、この単元を通してこれまで知らなかった友だちの一面を発見できる機会としたい。
- ・本単元において児童は、初めて「He / She」という表現に出会う。そのため、有名人やアニメのキャラクター、先生達の写真など、児童に親しみのある人物を用いてゲームをしたり、コミュニケーションを図る場を設定したりすることで、その使い方に慣れさせ、ゴールの活動につなげるようにする。
- ・ゴールの活動であるクイズ大会を行う前に、ペアでクイズを出し合い、互いに賞賛や助言をし合うことで、自分の課題やよりよい紹介の仕方に気づき、工夫して紹介できるようにする。
- ・各授業の主活動においては、活動の途中で形成的評価を行う。そうすることで、児童が活動のめあてを強く意識したり、コミュニケーションにおける大切なポイントを振り返ったりしながら後半の活動に生かせるようにする。

#### ウ 本時の目標 “He / She” “can/ can’t”の表現を用いて、友だちや先生のことやできないことについて、紹介することができる。

【思考力・判断力・表現力等】「話すこと（やりとり）」

エ 本時の展開（4時間目／モジュール学習6コマ，45分授業5時間扱い）

過程	児童の活動	教師の指示・支援（T）と児童の反応や様子（C）
Warm up	1 Greeting. 2 Let's chant. 3 Small talk.	T: Hello. everyone. How are you? T: Let's chant.1, 2, 3, 4, ... T: Let's talk about "My friend." Look at our demonstration.
Activity	4 Today's goal.  5 Let's practice. (1)教師によるデモンストレーションを見る。 (2)専科と練習 (3)1人で練習 (4)ペアで練習  6 Let's talk. (1)活動の仕方を知る (2)コミュニケーション活動（前半） (3)形成的評価  (4)コミュニケーション活動（後半）  7 Let's write.	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">先生や友だちについて紹介するクイズ大会をしよう。</div> T: デモンストレーションを見てみましょう。 【Level 1】友だちや先生のできることやできないことを紹介する。 【Level 2】友だちや先生のできることやできないことについて、自分のことも含めながら紹介する。 T:自分のことも紹介して【Level 2】を意識して練習してみましょう。  <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">  <p>T1: He is a teacher. He can run fast. (A: I can/can't run fast.) He can cook. (A: I can/can't cook.) Who is this? T2: He is ~sensei. T1: That's right. Good job. T2: Thank you.</p> </div> T: AさんとBさんのやり取りを見てみましょう。（形成的評価） どんなどころがよいですか？ C: 自分のことを付け加えて伝えている。 C: レベル2に挑戦していた。 T: レベル2を目指して後半の活動をしましょう。  T: He/She や can /can't を判断して書き写してみましょう。
Looking back	8 Looking back. 9 Greeting.	T: 自己評価が終わったら、友だちへのコメントを書きましょう。  

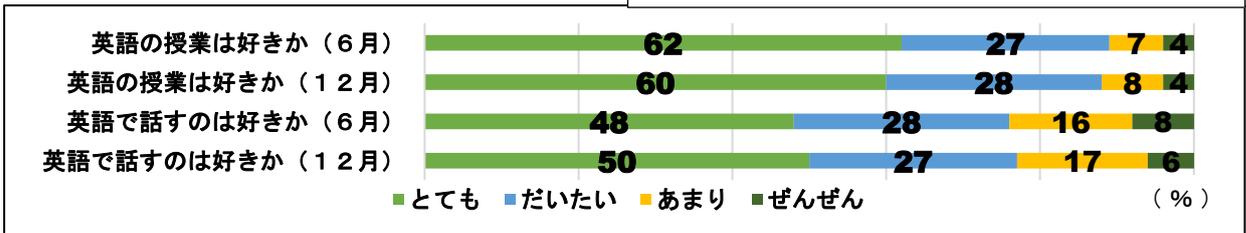
オ 考察

- ・児童の振り返りに「これからも英語を通して友だちのことを知りたい。」という記述があり，他者理解につなげることができた。
- ・新出の「He/She」という表現に出会わせる際に，有名人や先生達の写真を用いてゲームをしたり，コミュニケーションを図ったりしたことで，新しい表現への抵抗感が減り，自信をもってゴールの活動を迎えることができていた。
- ・全体での活動の前にペアでクイズを出し合い，互いに賞賛や助言をし合ったことで，さらによりよい紹介にするための工夫を思考し，コミュニケーションの質を高めようとする姿が見られた。
- ・主活動の途中で形成的評価を行ったことで，A評価に値する姿を目指そうとする姿が見られたり，コミュニケーションにおける大切なポイントへの意識を高めたりして，後半の活動に臨もうとする児童の姿が見られた。

## 7 研究の成果と課題（○成果 ●課題）

### (1) 児童の意識調査から

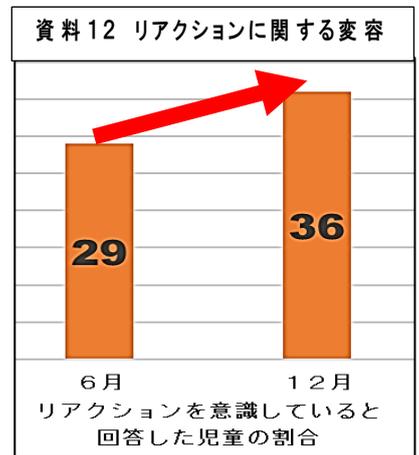
資料11 児童アンケート(6月と12月の比較)



○ 資料11からもわかるように、「英語の授業を好き」と回答した児童は依然として高い割合となっており、多くの児童が英語に好意的に親しんでいる。

○ 「英語を話すのがとても好き」と回答した児童が前回よりも増えており、反対に「ぜんぜん」と回答した児童が減少した。スモールステップで自信をつけさせたことにより、話すことへの抵抗感が少なくなったためと思われる。今後もスモールステップで授業展開をしていくと同時に、「try & error」の姿を褒め、間違いを恐れない児童の育成を図っていく。

○ 本校のコミュニケーションポイントで一番低い数値となっていたリアクションだが、リアクション表の活用や、デモンストレーションの際の教師の使用モデルにより、意識している割合が高まった（資料12）。



● 6月に「英語の授業をあまり好きではない、全然好きではない」と回答した児童は、12月にも同様の回答であった。苦手意識が固定化していることは危惧すべきことである。個に応じた指導の在り方を英語でも模索していきたい。

### (2) 仮説から

ア 仮説1（単元指導カリキュラム作成や、学習指導の工夫）について

○ 単元のゴールを設定することで、見通しを持って学習が進められた。また、魅力的なゴールづくりを工夫し、相手意識をもったやりとりや、自分の気持ちや考えを伝え合う姿につながった。

○ 活動の途中に形成的評価を行うことで、前半の活動よりも後半の活動の方が相手をより意識できるようになった。

● 年間指導計画や単元指導計画に沿った学習を進めてきたが、次年度は高学年で教科書が採用され、計画等も一新されることになる。4月からのスムーズな学習スタートに向けて、今年度の内にできる準備をしていく必要がある。

イ 仮説2（英語環境の整備や日常指導の工夫）について

○ 定期的に英語の掲示物を貼り替えたことで、児童の興味関心を継続的に高めることができた。